

山鹿素行の「聖学」における学習内容論の考察

—— 陶冶の素材を中心に ——

内 山 宗 昭

(序)

山鹿素行（一六二二—一六八五）の学習観に関して、拙稿「山鹿素行の学習観——「聖学」の方法論を中心に——」^①で、その目的論と方法論を中心に考察を行なった。本稿では、そこで残した学習の内容論についての考察をしたい。

素行が「聖学」で説いている一連の学問論に、個人がどのように学習を進めてゆくかについて、目的・内容・方法にわたり詳述されているのを見ることが出来る。素行の「聖学」にあつては、とりわけ方法的な関心が多くを占めているのだが、どのように学ぶかという関心は、とりもなおさず何を学習するかという素材の問題、即ち陶冶材としての内容の把握があつて導かれるものである。本稿では、内容面から焦点をあてることにより、素行の学習観の特質を明らかにしたいと考える。

まず、素行の学習観の中で、内容論が占める位置について、素行

の「博文」「明知」「日用」の概念とその関係論より、その基本的特徴を明らかにしておきたい。

次に、陶冶の素材が特に為政者としての武士上層を対象とすることで、武士の教養としてどのような知識の体系としてとらえていたのかをみてゆくことにする。

さらに、前記をも含めた素行の学習内容論の全体について検討し、素材の範囲と特徴について考察を試みる。

一、「聖学」学習観の内容論の基本的特徴

素行の「聖学」の学習論の骨子は、「博文」「明知」「日用」の三つの方法と領域にあると考えられる。即ち、「博文」とは、広い知識の習得を指し、「明知」は知を磨き道理・規範を究明することの意味し、「日用」とは、日常・家職等社会生活全般を指すとともに、それを通じて学ぶことを意味する。これらの要素は素行の「聖学」の基本的な性格に関わっており、とりわけ「日用」は、素行の

学習論の重要な概念である。なぜなら素行にとって学習の過程とは社会化の過程全体を想定しているのであり、それゆえ「下学上達」を主張し、「日用事物」が陶冶材として重んじられるのである。しかし、同時に、素行は社会化を経験的なものに収斂するというよりも、むしろ「知」を媒介とした陶冶の過程とみなすことで、前提としての、広範な知識の習得を奨励し、読書を中心とした文字による学習を相対的にはやはり重視し、そこに記される多くの事例から倫理規範なりを導くがゆえに、事例自体の学習を肝要と考えているのである。即ち、社会化の素材として故実が重視されるが、故実の歴史的究明（来歴の研究）は目的ではないという観点を持っていることに特色がある。²⁾

このように素行の説く学習論は主知主義的傾向を強く持ち、諸事例を広範囲に学習する必要とともに、そこから現実の実態・質差を学び考察する意義を強く主張していた。特に、外面的で即物的な事物の探究を意図的に方法とする性格から、政治・歴史・地形・風俗・産物等にわたる諸事の知識に言及する。しかし、素行の事物の探究とは、主に文献資料を基とした探究であり、「用法」についての探究はあっても科学的な探究の萌芽につながるものとはいえない。事物の範疇にある関心の中心は、人物の伝記とみるべきで、その業績・行動・思想の是非に関わる素材が主であることから、倫理思想の基盤となる素材としての意味が、その「博文」という作業、即ち広範な学習営為の中にあることをよく示している。

「博文」としての古典の思想・歴史・政治・地理等の知識の学

習、そして「日用」である日常生活・社会一般の諸事・規範の学習は、「明知」としての知的判断力・洞察力を陶冶する過程に連接する。「博文」「日用」の学習は、その背後にある倫理・行動規範を探究する前提であり、陶冶材であると同時に、知的判断力・洞察力を形成しその学習成果を再び自身の「日用」に適用することが目的であった。しかしそれは、直接経験が先行するものではなく、知識自体の重要性は相対的に上位にある。行為・判断の習得が学習内容となっている点で「書物」が学習内容ではない点に特色があるが、経験先行型ではなく、知識から入る型である。また単なる規範を記憶しそれに準えることを学ぶことではなく、「立志」による工夫等が主体的な学習の質を高めてゆくと考えていることから明らかにように学習過程に形式陶冶的面を持っている。段階としては、知識の学習の後に、考察・応用の過程を経て知的判断力・洞察力を形成するという形式陶冶としての学習説が位置していた。

素行にあつて「日用の余力」になすべきとされ相対的に二義的な位置付けがなされている「博文」は、翻って上記の目的のための陶冶材として不可欠な「礼楽制度の詳細、古今の事変、聖人立教の根本」³⁾を内容とすることで実質的には重い意味を持っている。素行では、こうして①知識習得の際、質に並んで量も重要な要素になる点、②規範を学ぶ事例としての知識が重視される点、③「聖經」と考える中心的な古典のみに依拠することなく、素材を広く渉獵することを求める点、④その趣旨及び「日用」への適用の観点から中国古典に優って日本での事例を内容とする点に特色を有することにな

る。⁴

「日用」の概念が素行の「実学」の最も重要な要素であり、学習観を基礎付ける特質に関わることは拙論でも指摘した。⁵素行の学習論では、行動規範を習得することを目的に、社会性、職能に関わりつつ、会話・容貌・身なり・衣食住にわたる日常の倫理規範に関する事例に看取される規範性を考察し類に應用させることが方法であった。即ち規範性の理解と應用を習得するということを意味する。しかしその際、学習者各自が規範について各自独自の研究をしつつ應用を進めるのが目的であるかといえ、むしろそうではなく、その点では、学習者は、実際には素行が指定した不定の理念や具体的な事物の知識を習得したところで、その適用をはかるという営為が主となっていることがわかる。

なぜかといえば、素行における社会性のとらえ方とその意味において、先行研究でも指摘されているように、「命に安んず」という精神から、現実には直面する職・生業をそのまま受け入れ励むという契機が根底にあるからである。「日用」を換言すれば、人が日々用いているもの、日々行っていること、日々の生活の中でその人の身辺のこととしておこる様々なことであり、現実には生きて行く際に持たざるをえない日常があり、これが人間の「道」と認識する。社会から離れないで、職務・所与のものに当たるといふ姿勢であり、各人が「自分の身辺」に関心を集中する姿勢でもあると指摘されるところである。⁶この点で、素行の学習論は、日常の所与の生業（その趣旨では読書も含むことになろう）に根差して社会規範の本質を見定

め実践する態度を、いかに学ぶかを論じた学習論であるといえよう。所与のという視点は、当然のように、当期の社会体制をそのまま容認し承し、例えば階級・職種あるいは男女毎の学習内容が各々の所与の学すべき「業」として想定されることになる。素行が学校論等で、教化政策の観点から「道」と「業」を教育内容として重視し、生活規範の伝達と学習という過程を重視することに符合する。⁷以上にその位置と性格を述べたが、この素行が学習の過程で陶冶の材料として位置付けている「博文」と「日用」について、その具体的な内容こそが、ここで検討する対象である。陶冶材の内容と特徴を分析するのが本論の目的である。

二、武士の学習内容論

本稿では、素行が「聖学」として特に個人の学習の在り方を述べる中での、学習の内容となっている対象が主題である。その点では、拙論で取り上げてきたように、学校教育、社会教化、武士の家庭での教育等、種々の場での各々の教育論を展開している素行であり、各々に対象別の内容論が記述されていることに注意が必要である。

素行ではさらに、階級、職種、男女等の差に応じて教育内容を種別化する考え方に立ち詳論しており、武士であっても、君主・上層武士と一般武士の区別に応じた学習内容を想定し、また個人の学問への意志や専門的に学ぶか否かの別、そして資質の差も考量している。「聖学」篇の論旨の延長にある学習の内容は、素行の門人を対

象とした君主並びに君主を補佐するブレンとしての学問へ取り組む者が対象であり、君主・上層武士が想定されていると考えられるが、やや一般武士への広がりをもいたものとなっていると考えられる。素行は加えて、発達段階に応じた教育を論じることから、発達段階相応の学習内容がそれぞれに述べられている。⁽⁸⁾

ここにも「日用」の中で社会化することを学習と考える素行の観点が明確に現れているが、ここでは、素行が強く関心を持ち、その著作においても主に対象となっている武士上層の学問に取り組む者への学習内容について考察する。

では、素行が、武士の「日用」と考えた具体的な内容とは何かといえ、⁽⁹⁾「我れ等今日武士の門に出生せり、身に付いて五倫の交際有之、然れば自分の心得作法の外に、五倫の交、武士の上にての勤め有之」とし、「武門に付いてのわざ大小品多し」として以下の例をあげている。

「わざ」の「小事」として、「衣類・食物・屋作・用具の用法迄、武士の作法ある事也。殊更武芸の稽古、武具馬具の制法用法あり」とする一方、「わざ」の「大事」としては、「天下の治平礼楽の品、国郡の制、山林・海河・田畠・寺社・四民・公事訴訟の仕置、政道・兵法・軍法・陣法・営法・城築・戦法有之、是れ皆武將武士日用の業也」としている。⁽¹⁰⁾このように具体的な「日用」を掲げることが、素行の思想転回の重要な契機であることの表明であり、重要な部分であった。

形に耳目鼻口四支百体あり、其の内に性心情意血気の差別あり、此の身を用ふるに行住坐臥視聽言動の用あり、此の身を奉ずるに衣服居宅用器用物あり、飲食情欲のわかちあり、此の身の相接はる処に君臣父子夫婦長幼朋友の交際あり。⁽¹¹⁾

前の考察の中で、素行は子弟教育の内容として、『武家事紀』に集大成されたような知識、即ち政権の推移や諸家家臣の記録、法制、地理、武具の用法、築城法、戦略、武士の諸作法を含む武家故実を「実学」と考えたと指摘した。⁽¹²⁾これは素行が次のように君主の「小学」の学習方法を述べたところによる。

凡そ幼主平日の学は、唯だ古今の勢を審にし、地勢人情を知るに在り。今かの九州・中国・五畿・北陸・南海・関東・奥州の諸列侯、その家譜その土地、その軍功忠義、家の興廢、列国群臣の譜及び言行、日々以てこれを審にす。これ本朝の武学なり。これを忽にして史・漢に渉るは、近きを措いて遠きを略するなり。豈実学ならんや。古人皆かくの如し。外国の学専ら春秋を以てするも亦然り。⁽¹³⁾

素行は中国古典中心の学習に対して、日本の武士の学問、即ち「武教」の立場を明確に出して日本の武家の歴史を学ぶことを強調している。「実学」として日本においての時宜を考察することを要求している。⁽¹⁴⁾そしてこれが「幼主平日の学」として「小学」の学習内容に位置づけられているのである。

このような点で、武家の故実に関する知識は、素行の学習内容の素材として、もつとも中心となる素材と考えられる。この点で、素行の『武家事紀』はその集大成という内容を持った著作で、前記の引用で指摘される内容について具体的な知識が集成されているのを見る事が出来る。

一方、素行の兵学の中心的な位置を占める著述に『武教全書』があるが、その内容の伝授については秘伝性があり、一般対象の学習内容とはやや別個に考える必要がある⁽¹⁵⁾。武士の教育・学問の在り方の基本を表明した著作に彼の『武教本論』があり、より具体的な学習の内容部に相当する記述が『武教小学』に窺われる⁽¹⁶⁾。素行が学習内容として一般的に指定しているのは、『武教小学』等に述べられているものと、やや専門的に原資料に溯った知識を扱うレベルとが考えられる。いずれにしても、『武家事紀』の百科全書的な総覧的な知識体系を背景にしながら、その中から基礎的な学習の内容として活用・咀嚼されたものが素行が実際に想定した学習内容でありその水準であると考えられる。『武教全書』にしても、『武家事紀』にしても、こうした叢書的な網羅的な知識全般を全て内容として学習者に課すことを想定したとは考えられない。体系的学問が一般的なものとして認識されたとは考えられず、それは専門家としての学者に要求された水準といえよう。

『武家事紀』ではその歴史的地理的知識の膨大な量が目につき、素行の博覧強記ぶりが窺われる。知識の総合的な体系化の作業が、素行の一方の大きな特質となっていると考えられる。素行はその学

習観で「詳らか」なることを旨としていたが、それはこの詳細さとその丹念でエネルギーを注ぎ込んだ資料蒐集力に裏打ちされている感がある。それは学習の質にかかる詳細さ広範さを背景・基底としている点で、初歩といいながら、初歩・基礎がここにつながり、かなり詳細で体系的な知識にかえてゆくことを考えさせる。少なくともそういう点で、『武家事紀』は学習内容の素材の総体と評価出来るものである。

『武家事紀』の成立は、延宝元年（一六七三年）素行五二歳の時であるが、前に寛文十一年（一六七一年）に中国・日本に関する百科事典的な著述『本朝事類』を著している⁽¹⁷⁾。またそれ以前寛文九年（一六六九年）の読書記録として『三才図絵』が記されており⁽¹⁸⁾、この前後に素行が百科全書的な関心で著作をなしていた経緯が窺われる。資料蒐集の結果、『武家事紀』と同年に例えば『日本国図』が編纂されているのを見る⁽²⁰⁾。『武家事紀』は武士教養の百科全書、即ち武士の学問・技芸を部門別に解説し体系化するという体裁を持つ著作である。素行の主知主義的な思想と学習観の原点にあるのは、ここに総合された合理的・唯物的な性格が窺われる知識の蒐集と体系化の発想であると考ええる。

『武家事紀』全五十八巻の内訳を量の面で巻数からみると「皇統要略」1、「武統要略」2、「武朝年譜」1、「君臣正統」1、「譜伝」7、「家臣」3、「諸家」2、「諸家家臣」1、「戦略」9、「合戦図」1、「古案」7、「法令」1、「式目」1、「地理」3、「駅路」2、「地図」1、「将礼」1、「武本」1、「武

家式」1、「年中行事」1、「国郡制」1、「職掌」1、「臣礼」1、「故実」4、「武芸」2、「雑芸」2である。「皇統要略」⁽²¹⁾「武統要略」は徳川政権までの政権史の概略と歴史認識の表明であり、「武朝年譜」⁽²¹⁾「君臣正統」で政権の歴史記述を扱い、「譜伝」⁽²¹⁾「家臣」⁽²¹⁾「諸家」⁽²¹⁾「諸家家臣」で歴代の君主と家臣の事歴に触れる。総じて君主・家臣の事歴がその大半を占めているといえる。「戰略」⁽²⁵⁾「合戦図」で合戦の歴史を扱い、「古案」⁽²⁵⁾「法令」⁽²⁵⁾「式目」で法令史を、「地理」⁽²⁵⁾「驛路」⁽²⁵⁾「地図」で軍事的観点からの地理に触れる。⁽²⁶⁾いずれも、兵学的・軍事的な意味での知識として扱われている。前述のように、ここには合戦図・戰略図・古戦地図・全国地図等豊富な図を伴い、主要街道・宿駅の里程のデータが丹念に記されている。「戰略」から「地図」までの戰略的・兵学的な知識は分量的に多くを占めている。

「将礼」⁽²⁷⁾「武本」⁽²⁷⁾「武家式」⁽²⁷⁾「年中行事」⁽²⁷⁾「国郡制」⁽²⁷⁾「職掌」⁽²⁷⁾「臣礼」⁽²⁷⁾「故実」⁽²⁷⁾「武芸」⁽²⁷⁾「雑芸」⁽²⁷⁾は武家に関わる故実の知識の集成で、武士の職業・生活全般に関わる礼法を記したものである。

「将礼」は武將の通過儀礼を中心に述べている。「御誕生」⁽²⁸⁾「御行始」⁽²⁸⁾「御著袴」⁽²⁸⁾「武具始」⁽²⁸⁾「乗馬始」⁽²⁸⁾「武芸」⁽²⁸⁾「御読書」⁽²⁸⁾「御手習」⁽²⁸⁾と年齢段階に注意しながら続き、「御元服」⁽²⁹⁾に至るが、記述の分量も多い。元服に続いて「御任官」⁽³⁰⁾、本格的な「御学問」⁽³⁰⁾に触れ、「御婚礼」⁽³¹⁾「將軍補佐」⁽³¹⁾「政所始」⁽³¹⁾「御弓始」⁽³¹⁾「評定始」⁽³¹⁾「視朝」⁽³¹⁾「御譲与」⁽³¹⁾と生涯での通過儀礼を特に「東鑑」からの引用等に照らして述べるが、⁽³²⁾武士としての一人前までの社会化の過程を通過

儀礼の中でとらえてゆく視点は素行の教育論の重要な要素ともなっている。⁽³³⁾「武本」⁽³³⁾「武家式」⁽³³⁾で武家の儀礼を特に後者では諸々の具体的な礼法・制度方法について総括的に述べており、⁽³⁴⁾以下の巻が各論となっている。

「年中行事」も詳細に一月から二月までの諸行事を追い各々の意義を解説しており、また贈答等の意義にも触れている。⁽³⁵⁾これも素行の教育方法論に年中行事の意義が主張されていることに照応するが、⁽³⁶⁾これらは通過儀礼や年中行事が社会化上果たす意義を強調する素行の認識の基底に関わる素材と考えられる。「国郡制」は安定期の文化的観点も交えた国土経営に触れ、「職掌」は同様職制についての知識である。「臣礼」⁽³⁷⁾では特に家の経営の問題が関心の中心と思われる。「故実」⁽³⁸⁾では「飲食」⁽³⁸⁾「衣服」⁽³⁸⁾「住居」⁽³⁸⁾に関する事物について事物毎に解説があり、加えて「武装・武具」⁽³⁹⁾の知識に言及している。「武芸」⁽⁴⁰⁾は、弓術・馬術・刀剣・鎗・鉄砲等の武器・武具について述べている。例えば、馬術という中には騎法のみならず馬の選定方法から飼育法・医療、馬具の知識等を含んでいる。⁽⁴²⁾馬術自体というよりも、馬術をめぐる知識の集成が目的でありその知識が武士の教養として意味を持つているとの認識が強く窺える記述の在り方である。最後に「雑芸」⁽⁴¹⁾とされて「読書・手習い」⁽⁴³⁾「詠歌・作文」⁽⁴³⁾「蹴鞠」⁽⁴³⁾「音楽」⁽⁴³⁾「狩獵」⁽⁴³⁾が触れられている。武士の嗜みとしての付加的な教養としての位置付けである。ここでの「読書・手習い・詠歌・作文」⁽⁴⁴⁾は、文芸的な視点からの教養あるいは技芸としてとらえられているものとみられ、道徳的な教学として説かれている

ものとは異なっている。技芸の一つとしての文字の習得と応用としてのレベルの読書・手習・詩文等は素行にとって極めて部分的な位置付けがされていることの証左であり、武士の教学の全体は、文字・読書を手段としながらも、ここに書かれた全体であるところの武士の「日用」に関わる教養全体への問題関心へと向かうものと認識されているのである。

以上に『武家事紀』の内容に照らして総覧的にみてきたが、前記の引用で示された学習の内容にある諸々の事物・事跡に関する知識との対応が窺える。即ち、武家を中心とした古今の政治史、精神文化・思想を含む人間の事歴、各地の諸大名家に関わる事績・経歴、戦略としての兵法知識、為政者としての国土経営に関わる山林・海河・田畠等の知識、職制・公務に関わる公事訴訟、階級、寺社等の知識、そして衣食住に関わる知識、用具・器物の用法・作法、武芸に関わって武具等の用法・作法についての知識である。

三、学習内容論の全体に関する検討

素行が学習内容と考えているものは、「日用」に基底を置き「知を明らか」にする過程全体に関わっており、社会化の過程での善悪の判断の形成と習慣形成また職能・生活技能の習得等がその内実である。

ここでは具体的な陶冶材の特徴を考えてみるのが目的であるが、素行が学習内容として措定している具体的な陶冶材について大別すると、「博文」で述べられる『大学』『論語』を中心に日本の

史書等にわたる読書による知識と「日用」で述べられる実践的・経験的な知識・技能の二面から考えられる。⁽⁴⁵⁾ ①「文字・訓詁・象数・名物凡例の記憶」等と記されるような文字・言語に関わる基礎的学習。②『大学』『論語』の根本的な「聖經」をはじめ『書経』『詩経』『易経』『礼記』『春秋』、他「賢伝史子」の類による諸々の古典による、「聖人」の教育・学問・政治思想他、諸々の言行録、「礼楽」制度の詳細と歴史にわたる学習。③『武家事紀』に素材を求められるような日本の武家を中心とした歴史、地形・風俗・産物にわたる地理、言行録から「人品人情の長短」を知る等の学習。④「業」「作法」として述べられる「日用」の諸々の内容に相当する、「修身・齊家」にかかる起床就寝、視聴、会話、応対、容貌身なり等の立ち居振る舞い、衣食住、財産管理、物品の周旋、教養・嗜み、子弟の教育、交友等、そして職能を含む日常の倫理規範全般の学習。⑤その他、「六芸」と表現されるもののうち、上記に入っていない内容のもの、例えば、天文・暦数・自然地理や技芸、また武芸等の学習。にわたっていると考えられる。

①は「小学」として位置し、より基礎的な学習事項に相当する部分といえ、発達段階に応じた学習説が説かれる中でも、初歩的な学習内容として述べられている事項に対応している。②は「聖学」篇で主に「読書」論として展開される内容に相当しており、素行が特に重視した幾つかの中国の古典からの引用とそれを補足する諸典籍からの知識の集成を内容としている。学習の段階としては「小学」

から「大学」までを含んでいる。③は同様の趣旨を日本での知識として集成、適用したものが内容となっており、それは前節で検討した内容に相当するものといえる。④は素行の「日用」論に該当する内容を持つ。社会化の過程に直接する生活規範・作法等社会的な諸事項自体を内容とするものである。⑤は主に①の内容に関わって述べられるその他の項目であり、例えば「六芸」として取り上げられるもののうち、主に論じられる項目以外の項目が該当する。

⑤はその点で広範であり、素行は「小学」を「古今の事物」の学習ととらえ、「天文・地理・六芸・文武の事物」を学び「身体骨節をならはし、古今のわざを知る」と述べている。⁽⁴⁶⁾ 身体鍛練、また事物の学習でも「天文」「地理」といった領域が該当する。「天文」の内容は『山鹿語類』の「聖学」篇を参考にすれば、五行説を中心とした「天地」論に立ちつつ、天体宇宙・暦・気象・気候等に関わる知識である。⁽⁴⁷⁾ 「地理」は「天文」説の延長で自然地理的知識を中心としつつ「山・河・海・岩石・地震」等についての風土の知識である。⁽⁴⁸⁾ 「地理」でも③の中では前述のように、地形、風俗、方言、産物等についての知識の必要が説かれているが、それ以外の側面である。また素行が「六芸」と記す場合、中国古典の「六芸」の内容をそのまま踏襲することが趣旨ではなく、基礎学習としての全般的な意味で記すのであるが、強いて「六芸」の内容すなわち「礼・楽・射・御・書・数」に対応していえば、「六芸」としての「礼」とは幼少から身に付けるべき行儀作法というレベルに該当し、④に重なる部分がある。「礼」に比して「楽」について十分述

べられているのを見ることが少ないが、「交接の間礼斗りを以てすれば和することあらざるを以て、打とけやわらぎて心易く親しみ楽しむことあり。内に和順の情あれば、外に唱歌詠歌の聲生じ、金鼓の聲をかり舞踏のすがたを以てし、目を喜ばしめ耳をたのしましむ、是れを楽と云ふ。」⁽⁴⁹⁾ としている。観点として④で再三強調される社会的な「応接」の延長に「楽」が考えられているのが注意される。「射・御」も武芸の基礎的な段階での技能習練の一端を指し、

「弱年の間に四支身体骨節を心に叶はしむる、これ威儀の則にして武威の儀をただすの謂也」⁽⁵⁰⁾ と身体鍛練としての意義を述べている。「書」も読み書きを指し、書法等の技能的な面にあたるが、②と③の学習のための基礎的な技能となる。「数」は「暦数」や「地理の里程」等に現れてくるが、「物の算数つもりかんがへを知る、是れを数と云へり。」⁽⁵¹⁾ としている。また「書数の二つは事物の情に通すべきことわざなれば、ここにおいては是非邪正の智をねらしむるのゆゑん也」⁽⁵²⁾ と述べている。「六芸」にはこのように、①に相当する部分とそれ以外に他のところではあまり述べられていない部分とを含んでいる。

①の内容は、例えば、初学者は「小学」の方法を守り「詳に文字訓詁象数名物凡例を記得す」⁽⁵³⁾ とあり、記憶すべき事項として述べられている。素行の「教戒に節あり」とする発達に即応した教育の必要説にあつては、学習を意識的にはじめてゆく年齢として、「七情ともに全く、四支良堅く、知物に及ぶべし、口舌調る」⁽⁵⁴⁾ 段階の六歳を標準としている。「男女ともに六歳より其の才の得たらん方をは

かり、其の好まざる處に任せて」、男女とも詩歌の暗記と家職の学びをあげ、男子で読書をあげている。⁽⁵⁵⁾家職の学びは④に関係する。

学習論として一貫して繰り返し主たる陶冶材として主張されているのは、②③④の学習内容である。このうち、③は「実学」たるべく中国古典同様日本についての知識を得る目的で扱われる知識の集成に相当しているが、その詳細は前節で述べた『武家事紀』にみた諸事項に相当している。

③の内容に適用発展してゆく前段階として②の内容はある。儒学者素行にあつて、学習論の基底部をなすところでもある。即ち、中国古典に関する学習内容を基盤としつつ、そこで得た思想とりわけ社会規範に関する理念を中心にその適用を③④へと図るのが構造であるから、専ら書物からの引用による知識の集成であるが、学問の骨格ともなることになる。②については、素行の「読書」論にある中国古典の評価についてみておく必要があるだろう。素行が繰り返し強調するのは「読書」と「世事」が乖離する危惧であり、⁽⁵⁶⁾学習内容上②と④は密接に関係する。②と④を単に分割することは素行の意志に叶わないものとみるべきである。そこには政教一致観が背景にあると考えられ、そこで「読書」論でも規範となる古典としてその「三綱領（明德・親民・至善）⁽⁵⁷⁾・八條目（格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下）⁽⁵⁸⁾」を理念とする『大学』を第一に掲げるのを見ることが出来る。⁽⁵⁹⁾次に聖人の言行録の意義を持つものとして『論語』をあげる。この二書を素行は古学としての「聖人の

書」ととらえるのであり、「聖人の書、幸いに大学経一章の全篇あり。是れ聖学の淵源にして、古人学を為すの始終なり。」⁽⁶⁰⁾とあり、「大学は万世聖学の標準なり：故に聖学は此の書に始まりて此の書に終る」とする。次いで『中庸』『孟子』、そして「六経」が掲げられるが、その位置は『大学』の趣旨を傍証する資料と考えられている。⁽⁶²⁾

『大学』は精読熟読を要し規範的な意味を持つとみなされている⁽⁶³⁾が、こうした規範的な古典以外に、注釈のとらえ方に窺われるように、⁽⁶⁴⁾「広才」の助けとしての「博文」の意味で、多くの解釈を参考にしたり、逆に批判的に読んだり、⁽⁶⁵⁾「雑書」とされるものにも学習の範囲を広げる事を推奨している。「博文」が意味を持つのは、「日用」において通常「応接」の体験の少ない者は、こうした言行録を便りに学習し適用が可能だからでもある。⁽⁶⁶⁾一方日常の応接の体験のみでは不十分ゆえ「学者の格致尤も読書に存り」としてそれを補完する意味を持たせている。知識の選択も必要としながら、中国古典の先例としての「聖人」の教化政策の根本と制度・歴史を中心とした書物の知識と、その応用として助けとなるものは広く学習する必要を説いた。「其の善なる者を撰び、其の不可なる者を戒む⁽⁶⁸⁾」という学習方法であるから不可なる言行の知識も知っている必要があることになる。「雑子」⁽⁶⁹⁾として諸家の学説をとりあげている。

また「史書」について、『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』『隋書』『資治通鑑』『通鑑綱目』『唐鑑』『綱鑑彙纂』の書があり、また「史書」についてのみ『東鑑』などの日本の歴史書が掲

「旧事本紀」「古事記」「日本書紀」「続日本紀」以下六国史の書名をあげ、「其餘各一家の私記あれど、取り用ふるに足らず、只だ博覧の一助なり。本朝は太だ文書に乏しく、又家記を秘す。」とする。読書篇末尾に少ない紙数で「詩文」を扱っている。⁽⁷¹⁾さて④については、例えば次のように表現される。

日用は百姓日々用ひ来る底なり、学は学んで之れを效ひ、而して其の道を正すなり。人々に動静語黙飲食衣服の設けあり、父子君臣交接交際の礼あり、世々窮理し来りて、我れ先に覚了習慣す、故に是れ乃ち学なることを知らず。…今日の間数般の件々あり、是れ日用なり。子細に看れば裏面多少の道理あり、須らく是れ件々を研究すべし、是れ学なり。⁽⁷²⁾

『武教小学』には、このような武士の「日用」としての内容が記されている。

起床から就寝までの日常生活についての「礼」を問題にするが、早起き、洗面、服装、父母への挨拶、家業、交友・接客、帰宅後の挨拶、留守中の用件への対処、閑暇での諸事への対応の反省、道義の省察、読書、夜の安全確認、就寝まで細かい。⁽⁷³⁾

例えば言語応対については、用語の種別に兵法用語・冠婚葬祭用語等の種別を認識し、武士は古戦場等の事、武義の盛衰、義不義の論の議論をし、他人の非難、政治批判、遊興・色事を談ずることは否定する言があるなど、主題別に振る舞いを論じる。同様、衣食住、財産等の管理、贈答等に触れてゆく。「飲食・色欲」の問題に

ついて、「情欲」は「自然の節」として生理と節度の問題としてとらえる一方、武士は家職の責任の重さから節度を持つという事由を示す。素行はこのように、社会的な責任の視点から結論を導くことが多い。⁽⁷⁶⁾「与受」即贈答・物品のやりとりに関わつては、社会性から節度を保つべきとされ、身に余る蓄財を否定する経済観念がある。⁽⁷⁷⁾このように丹念に類例をあげてゆくことにも、素行の「道」が卑近な日常規範である「礼」即ち社会規範の習得に他ならないことをよく示していると思われる。また子弟への教育が武士の「日用」の一事であるとしていることにも注意が必要である。「日用」の内容には後継者の教育という営為が含まれているのである。⁽⁷⁸⁾

素行の陶冶材の内訳をみると、まず明瞭なのは、「詩文」のような文芸的な素材はほとんど取り上げられていないことである。教材観として、例えば『和漢朗詠集』等を使用する等の中世から伝統のある教材観とは距離があり、そのような意味で古典はとりあげられることはない。故実から導かれる生活慣例とその意味の認知が陶冶材の意味となる。従つて、その素材や資料の取り上げ方は、詳細であり、引用も丹念となり、知識の体系化が必然的に導かれてゆく。素材は素行にとつていわば精神的遺産としてとらえているものであるが、為政者としてあずかる武士としての日常の行動原理に資する範疇で意味を持っている。分野としては、産物・風俗等地誌的な関心も直接に含んでおり、素材としては多岐にわたっている。

(結)

本稿では、学習の内容論について武士の個人の学習論の素材を中心に考察した。この陶冶材が、素行の他の論での陶冶材観とどう関係があるか、即ち、庶民学校教育内容論などという関係があるのか、また発達段階相当の陶冶材との関連・比較の検討等を課題として残した。同時に、他の儒者等の論や実態としての学習の素材観との比較からみた特徴の究明も課題である。

本稿は、網羅的に陶冶材の体系を総括する前に、方法との関係、その領域、著作上の位置等を中心に触れておく必要から考察を行った。陶冶材の総覧的な作業は稿を改めたい。また、この陶冶材の意味についての検討、そしてこれが全体の構造といかなる関係にあるのかの検討も稿を改めて考察する予定である。

【註】

- (1) 拙稿「山鹿素行の学習観——「聖学」の方法論を中心に——」(工学院大学共通課程研究論叢第三三三号・一九九五年一月)。
- (2) 同論文参照。以下同論文より、「博文」「明知」「日用」に関係する部分を再度取り上げ、その意味の考察を行った。素行の原文は同論文の註記を参照のこと。
- (3) 山鹿語類・広瀬豊編『山鹿素行全集思想篇』(昭和十七年・岩波書店)九・一六六頁。
- (4) 謫居童問・同前二・二四頁。
- (5) 拙稿「山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察——学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に——」(工学院大学共通課程研究論叢

- 第三六一二号・一九九八年二月)。
- (6) 立花均「山鹿素行における日用の学成立の契機」(季刊日本思想史・二五・一九八四年)参照。
- (7) 「日用事物」「百姓日用の間」と表現される実学性は学校教育の内容に比定される(山鹿語類・(前掲)九・一二四頁)。
- (8) 山鹿語類・(前掲)九・一六〇頁。同前六・二八九—二九二頁。拙稿「山鹿素行の児童教育論——児童理解と教育方法を中心として」(早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第十一集・一九八四年三月)参照。
- (9) 配所残筆・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一二・五九七頁。
- (10) 同前。
- (11) 山鹿語類・(前掲)七・一四〇頁。
- (12) 拙稿「山鹿素行の教育観の形成——四教一致から古学への転回を中心に——」(工学院大学共通課程研究論叢二八・一九九〇年二月・一七七頁)参照。
- (13) 随録(延宝六年)・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一一・五五六頁。
- (14) 註(4)参照。
- (15) 石岡久夫「山鹿素行兵法学の史的研究」一九八〇年・二〇〇頁参照。
- (16) 拙稿「山鹿素行の教学観——武教の成立を中心に——」(工学院大学共通課程研究論叢二七・一九八九年二月)参照。
- (17) 武家事紀自序・山鹿素行全集刊行会『武家事紀』(大正四年)(明治百年史叢書・一九八二年二月復刻・原書房)上・所収。
- (18) 年譜・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一五・一二二頁。
- (19) 山鹿素行略年譜・同前一・四〇頁。
- (20) 年譜・(前掲)一五・一二九頁。地図等の資料に関して、その作成の経緯等、山鹿光世『山鹿素行』一九八一年・原書房・一三九—一四〇頁参照。
- (21) 武家事紀・『武家事紀』(前掲)上・一一六六頁。
- (22) 同前・上・六七—一二五頁。
- (23) 同前・上・一二六—一四八頁。
- (24) 同前・中・一一四—一三六頁。
- (25) 同前・中・四三七—七七六頁。
- (26) 同前・下・一一三八—一三八三頁。
- (27) 同前・下・一一三八—一三八三頁。
- (28) 同前・下・三八四—三九三頁。
- (29) 同前・下・三九三—三九九頁。

- (30) 同前・下・三九九―四〇〇頁。
 (31) 同前・下・四〇〇―四〇三頁。「御学問ト云ハ、古老ノ勇士・故実有職ノ輩・文道達芸ノ者ヲ近習ニ招カレ、武芸ノ道・古戦ノ物語・異朝ノ面白タメシ・諸事ノ故実ヲ尋問玉フ事也」(同・四〇〇頁)としている。
 (32) 同前・下・四〇三―四一三頁。政務に慣れることを中心とした社会化を問題にしているといえる。
 (33) 拙稿「山鹿素行の児童教育論―児童理解と教育方法を中心として―」(前掲) 参照。
 (34) 武家事紀・(前掲) 下・四一四―四七二頁。
 (35) 同前・下・四七三―四九五頁。
 (36) 拙稿「山鹿素行の児童教育論―児童理解と教育方法を中心として―」(前掲) 参照。
 (37) 武家事紀・(前掲) 下・四九六―五二五頁。
 (38) 同前・下・五二六―五三三頁。
 (39) 同前・下・五三四―六一四頁。
 (40) 同前・下・六一五―六七〇頁。
 (41) 同前・下・六七一―七二六頁。
 (42) 同前・下・六七三―七〇二頁。
 (43) 同前・下・七二七―七四九頁。
 (44) 同前・下・七二七―七三七頁。
 (45) 拙稿「山鹿素行の教育論の思想構成上の特質に関する考察―学習論・家庭教育論・学校論の位置を中心に―」(前掲) 参照。
 (46) 謫居童問・「山鹿素行全集思想篇」(前掲) 一一・三三三頁。
 (47) 山鹿語類・同前十・五五―一七四頁。
 (48) 同前・一七四―一八六頁。
 (49) 同前六・二九三頁。
 (50) 同前・二九三―二九四頁。
 (51) 同前・二九四頁。
 (52) 同前・二九四頁。
 (53) 同前九・一六三頁。
 (54) 同前六・二九〇頁。
 (55) 同前・二九〇―二九一頁。
 (56) 綴話(子丑)・同前二・三四一頁。山鹿語類・同前九・一五八頁。
 (57) 山鹿語類・同前九・一四四頁。
 (58) 同前・一六一頁。

- (59) 同前・一六三頁。
 (60) 同前・一六一頁。
 (61) 同前九・二二〇頁。素行が「大学」を第一の古典と考えるのは、朱子の「大学」重視の言によりながら(山鹿語類・同前九・一六七頁、なお「大学」の政教一致観の評価と形而下的記述に終始しているからと考えられる。即ち、内観的な「性心」説の解釈がないことが主たる事由であると考えられる。これは「論語」についても同様である(山鹿語類・同前九・一三九頁)。
 (62) 山鹿語類・同前九・一六一頁。四書句読大全・同前一・一六九頁。「一章一句と雖も、容易に看過せんや。」(山鹿語類・同前九・一六九頁)、「句々字々理會すべし」(同前・一六四頁)、「切要の所に於いて詳に識り能く誦して記憶すべし」(同前・一六六頁)と述べられる部分もある。
 (63) 山鹿語類・同前九・一六八、一四三、一六四頁。
 (64) 同前・一六五、一六七頁。
 (65) 同前・一五九頁。
 (66) 同前・一五八―一九頁。
 (67) 同前・一五九頁。
 (68) 同前・二二九頁。
 (69) 同前・二九〇―三四〇頁。
 (70) 同前・三一五―三二六頁。
 (71) 同前・三二七―三四〇頁。
 (72) 同前・二二六―二二七頁。
 (73) 武教小学・同前一・五〇三―五二二頁。
 (74) 同前・五〇五頁。
 (75) 同前・五〇八頁。
 (76) 同前・五〇九頁。
 (77) 同前・五〇九頁。
 (78) 同前・五一〇―五一三頁。

(本学助教授)